

平成30年7月17日

平成30年度病虫害発生予報第4号

長崎県病虫害防除所長

【予報の概要】

農作物名	病虫害名	発生程度	
		現況	予想
早期水稲	いもち病（穂いもち）	—	並
	紋枯病	やや少	やや少
	穂吸汁性カメムシ類	並	やや多
普通期水稲	いもち病（葉いもち）	並	並
	紋枯病	並	並
	縞葉枯病	やや少	やや少
	セジロウンカ	少	やや少
	トビイロウンカ(防除情報第9号)	並	やや多
	コブノメイガ(防除情報第9号)	少	少
大豆	ハスモンヨトウ	—	やや多
いちご (育苗床)	うどんこ病	少	少
	炭疽病 (<i>Glomerella cingulata</i>)	並	並
	輪斑病	やや少	やや少
	ハダニ類	並	並
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病）	並	並
	アザミウマ類	並	並
かんきつ	かいよう病	並	並
	黒点病	やや少	やや少
	ミカンハダニ	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並
びわ	がんしゅ病	やや少	やや少
	灰斑病	やや少	やや少
	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多
なし	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多
ぶどう	べと病	少	少
果樹共通	果樹カメムシ類	多	やや多
茶	炭疽病	やや少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	並	並
	チャノコカクモンハマキ	並	並
	チャノホソガ	並	並
	カンザワハダニ	やや少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
	クワシロカイガラムシ	並	やや多

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稲

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（39筆）の結果、葉いもちの発病株率は4.7%

(1.6%)、発生圃場率は25.6%(21.2%)であり、一部多発圃場がみられた。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、葉いもちの発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は少ない見込みである。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(39筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.2%、発生圃場率7.4%)。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は58.0%(17.7%)であった。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査(27地点)の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は9.7頭(9.7頭)であった(表)。

イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり本虫の発生に好適である。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当り虫数						発生地点率	
	H26	H27	H28	H29	平年	H30	平年	H30
ホソハカメムシ	0.3	0.9	0.4	0.8	0.5	1.1	62.7	70.4
クモヘカメムシ	0.5	0.1	0.2	0.0	0.3	1.0	17.6	33.3
シラホシカメムシ	0.1	0.1	0.1	0.4	0.2	0.1	36.1	22.2
アカスジカスミカメ	4.2	5.5	7.2	7.6	8.6	7.8	83.1	85.2
ミナミアカメムシ	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	4.8	11.1
計	5.8	6.2	7.6	9.2	9.7	9.7		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除をおこなうと防除効果が高まる。

ウ ミナミアカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

普通期水稻

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(86筆)の結果、発病株率は0.1%(0.1%)、発

生圃場率は2.3%（2.5%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.4%）。

ウ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

月日	長崎	佐世保	島原	平戸	松浦	厳原	芦辺	福江	大瀬戸	口之津
7月1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月2日	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月4日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月5日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月6日	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—
7月7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月8日	—	—	—	—	●	—	—	—	—	2
7月9日	—	—	—	—	●	4	—	—	—	—
7月10日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月14日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

発生指標	?:判定 不能	—:好適 条件なし	1:準好 適条件1	2:準好 適条件2	3:準好 適条件3	4:準好 適条件4	●:好適 条件
------	------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	------------

* 感染した場合、感染好適と判断された日から7～10日後に病斑発現

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.0%、発生圃場率0.1%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率0.6%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

ウ 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、発生圃場率は9.3%（23.9%）であった。

エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、寄生株率は1.0%（7.5%）であった。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（86筆）の結果、株当たり虫数は0.0頭（0.3頭）、発生圃場率は27.9%（58.3%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（無防除）調査の結果、株当たり虫数は0.4頭

- (2.1頭)、寄生株率は31.0%(56.6%)であった。
- ウ 7月2半旬までの飛来は平年より少ない。
- エ 向こう1か月の気温は高い見込みであり本虫の発生に好適である。

5. トビイロウンカ

平成30年7月11日付け、**病害虫発生予察防除情報第9号**による。
 なお発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況

- ア 7月前期の巡回調査(86筆)の結果、発生を認めなかった(株当たり虫数0.0頭、寄生株率3.5%)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、発生を認めなかった(株当たり虫数0.0頭、寄生株率3.8%)。

6. コブノメイガ

平成30年7月11日付け、**病害虫発生予察防除情報第9号**による。
 なお発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況

- ア 7月前期の巡回調査(86筆)の結果、発生を認めなかった(食害株率0.8%)、食害発生圃場率7.7%)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、被害を認めなかった(食害株率5.4%)。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は7月2半旬がやや多かった(図)。

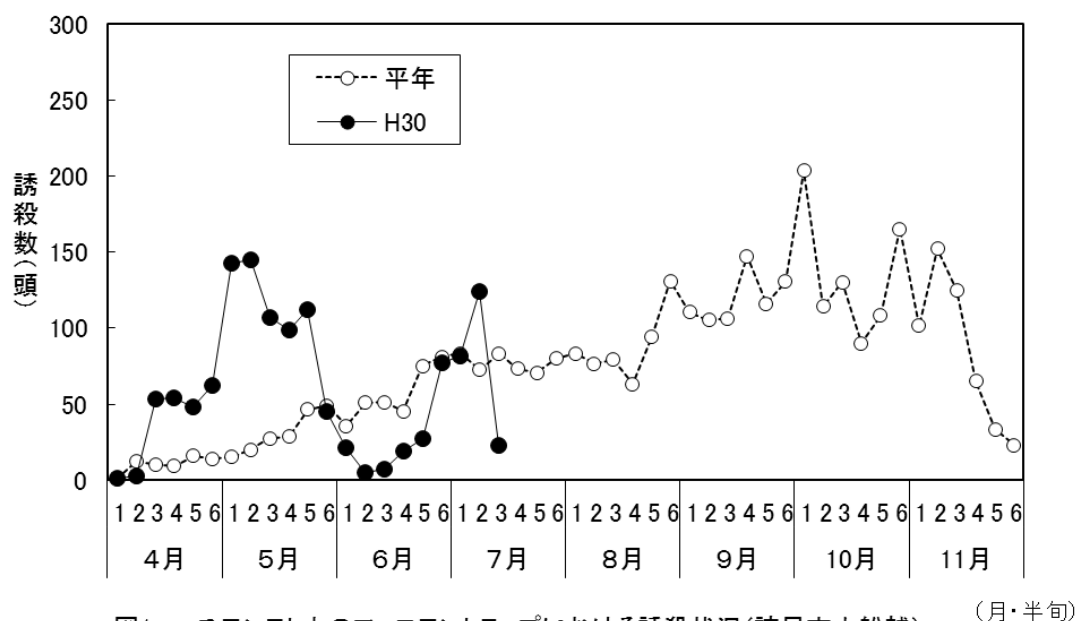


図1 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越)
 平年:H20~H29年の平均値(最大・最小値除く)

- イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。
- イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(29筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率2.5%、発生圃場率25.8%)であった。

2. 炭疽病 (*G. cingulata*)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(29筆)の結果、発病株率は0.07%(0.02%)、発生圃場率は3.4%(3.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実に行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。
- イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。
- ウ 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。また、発病した親株から採苗した子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。

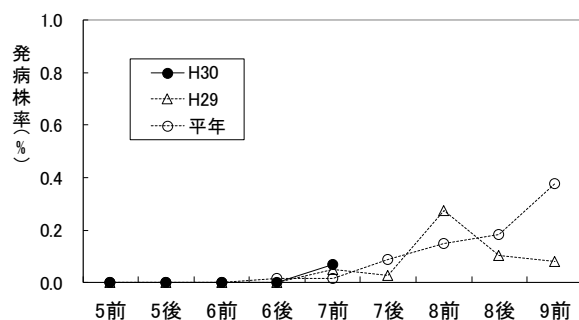


図 炭疽病(*G.cingulata*) 発病株率の推移

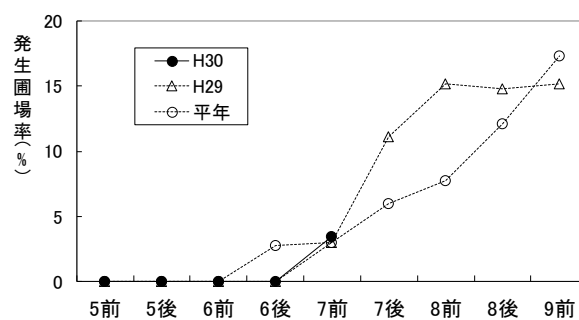


図 炭疽病(*G.cingulata*) 発生圃場率の推移

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(29筆)の結果、発病株率は2.9%(6.1%)、発生圃場率は20.7%(43.2%)であった。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(29筆)の結果、寄生株率は1.6%(2.4%)、発生

圃場率は17.2%（20.5%）であった。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 本圃への持込みを避けるため、定植までの防除対策を徹底する。
- イ 下葉の裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
- ウ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。
- エ 薬剤感受性低下の恐れが少なく、土着天敵に影響の少ない気門封鎖剤を活用する場合、これらの薬剤は卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。

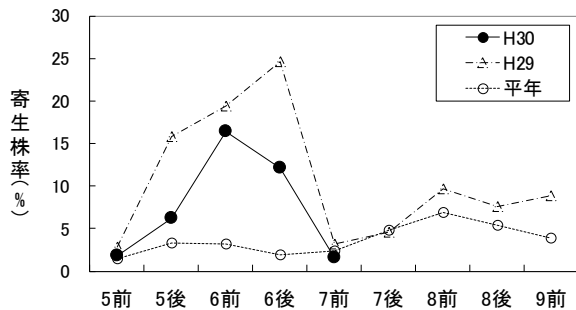


図 ハダニ類 寄生株率の推移

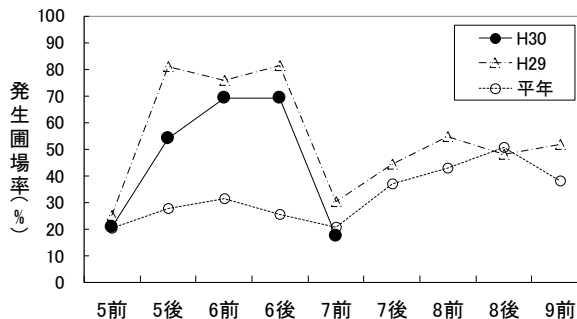


図 ハダニ類 発生圃場率の推移

アスパラガス

1. 斑点性病害

（1）予報内容

発生程度 並

（2）予報の根拠

7月前期の巡回調査（11筆）の結果、発病側枝率は2.4%（1.0%）、発生圃場率は36.4%（26.8%）で、一部多発圃場があった。

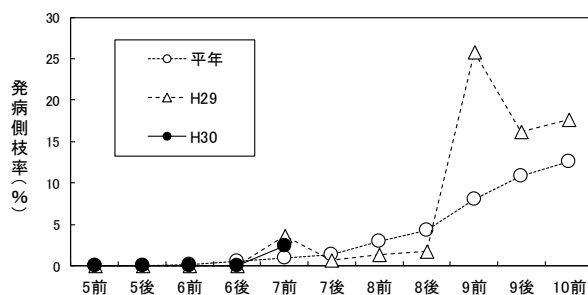


図 斑点性病害 発病側枝率の推移

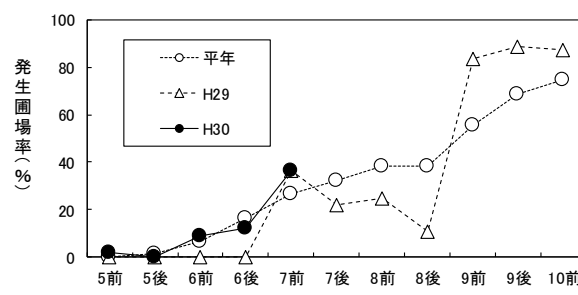


図 斑点性病害 発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

（1）予報内容

発生程度 並

（2）予報の根拠

7月前期の巡回調査（11筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所）は9.4頭（10.6頭）、発生圃場率は63.6%（73.1%）であった。

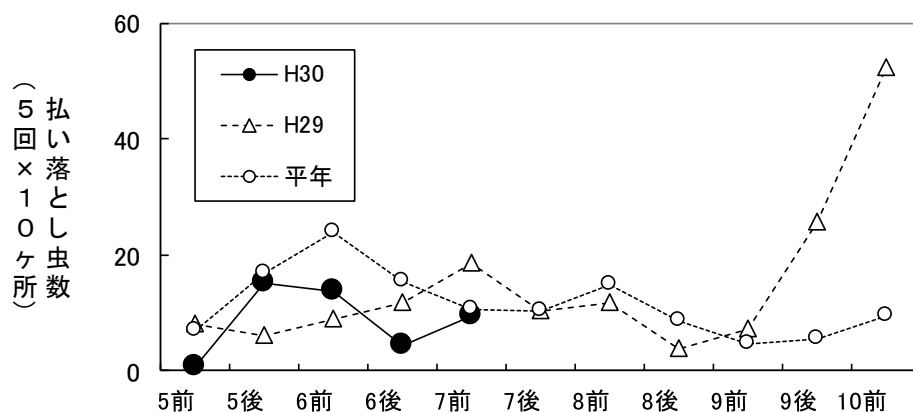


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病葉率は0.0%(0.2%)、葉の発生圃場率5.6%(8.0%)であった。発病果率は0.0%(0.0%)、果実の発生圃場率は2.8%(2.6%)であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病果率は0.1%(2.1%)、発生圃場率2.8%(20.2%)であった。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は6.4%(12.3%)、発生圃場率は41.7%(51.1%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(36筆)の結果、果梗部の被害果率0.6%(0.7%)、発生圃場率8.3%(10.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日

地点	長崎	佐世保	大瀬戸	口之津	平戸
第4世代	7/12	7/13	7/21	7/14	7/26
〃 (平年)	7/20	7/26	7/28	7/21	8/2
〃 (前年)	7/17	7/17	7/25	7/20	7/26
第5世代	7/29	7/30	8/8	7/31	8/13
〃 (平年)	8/5	8/11	8/15	8/6	8/20
〃 (前年)	8/2	8/2	8/11	8/5	8/12
第6世代	8/14	8/16	8/26	8/16	8/31
〃 (平年)	8/22	8/29	9/2	8/23	9/9
〃 (前年)	8/18	8/18	8/29	8/22	8/31
標高(m)	27	4	43	10	58

注1:発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温度により算出した。なお、積算には2018年7月16日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2:同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3:表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

ウ 黄色粘着トラップ（諫早市）の誘殺量（図）は、6月は平年より多く推移したが、本種の発生状況は園地の条件や地域間で異なる場合があるため、園地での発生状況の把握に努め、適期に防除を行う。

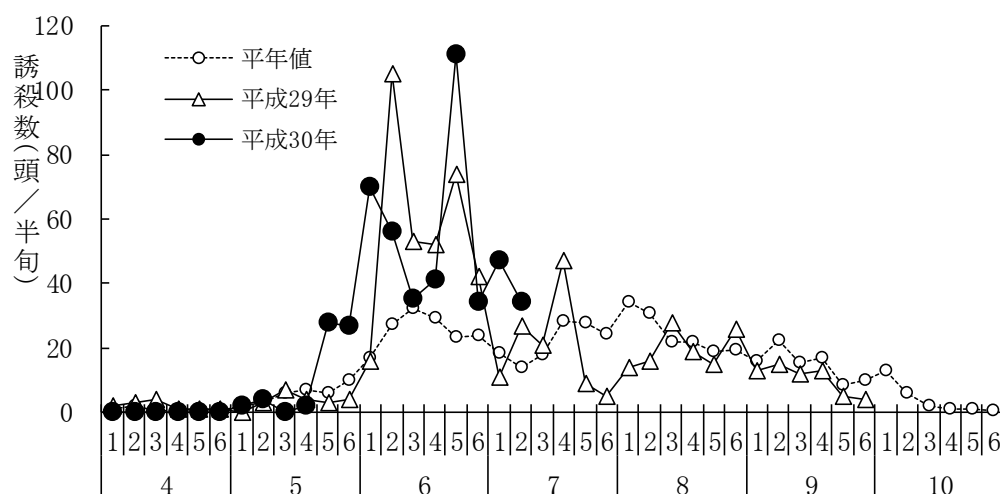


図 チャノキロアザミウマの誘殺状況 (諫早市小船越町:黄色粘着トラップ) (月・半旬)

び わ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めない（発病枝葉率0.6%、発生圃場率25.0%）。

2. 灰斑病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は18.6%(31.3%)、発生圃場率は90.0%(97.5%)であった。

3. ナシヒメシンクイ

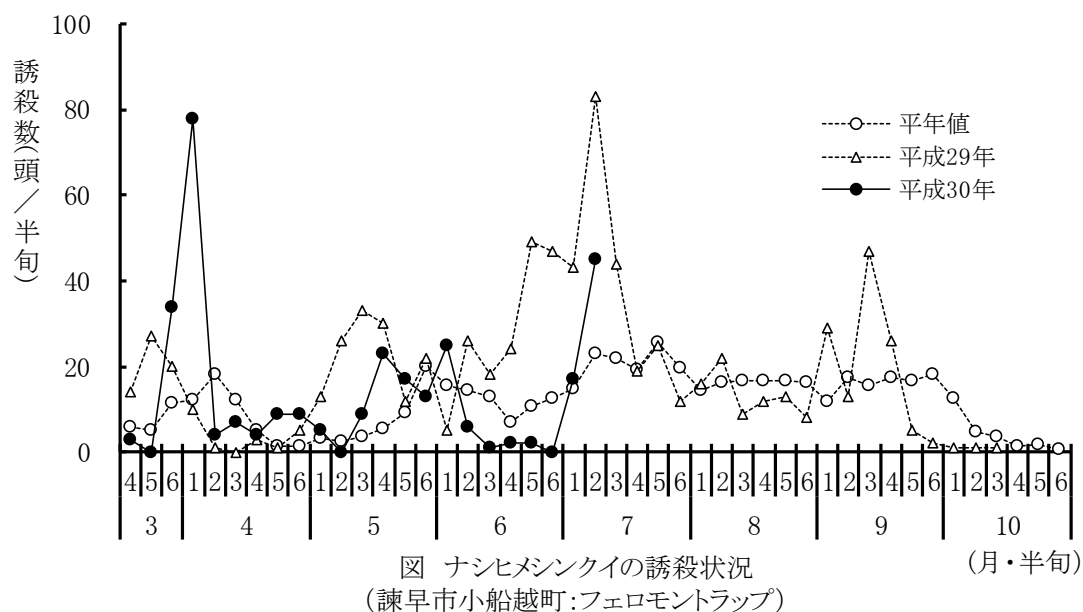
(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(10筆)の結果、枝葉への寄生を認めなかった(10か年平均 寄生枝葉率0.0%、発生圃場率1.0%)であった。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、やや多く推移している(図)。



(3) 防除上注意すべき事項

フェロモントラップにより発生消長を把握し、成虫の発生最盛期を目安に薬剤防除を実施する。

なし

1. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発生を認めなかった(前年も発生を認めない)。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、やや多く推移している(びわの項図参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

フェロモントラップにより発生消長を把握し、成虫の発生最盛期を目安に薬剤防除を実施する。

ぶどう

1. ベと病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は0.0%(3.3%)、発病圃場率は8.3%(38.5%)であった。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

フェロモントラップの誘殺量が多いが、7～8月は世代交代の時期のため、一時的に発生量は減少の見込み。

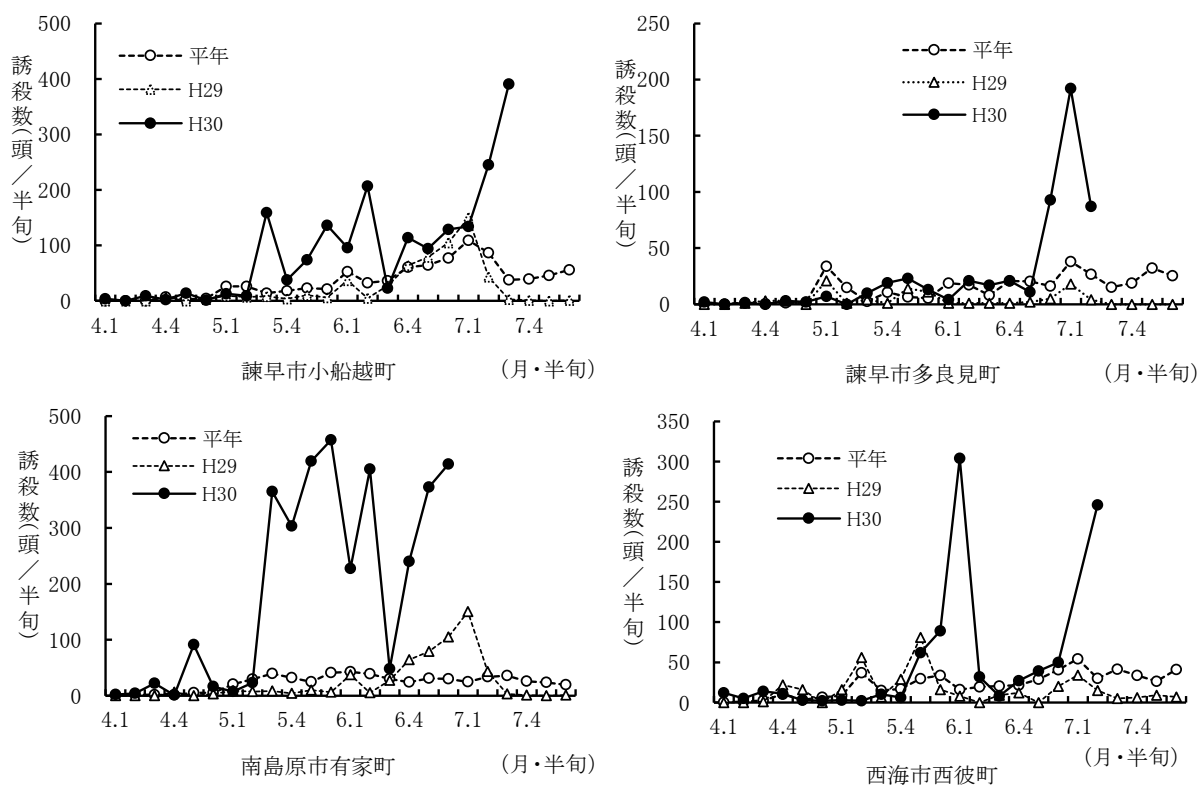


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

(3) 防除上注意すべき事項

本虫の飛来は地域や園地によって異なる場合があるので、見回りを徹底し、飛来が認められた場合には早急に防除を行う。

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（15筆）の結果、1㎡あたり発病葉数は0.3枚（3.0枚）、発生圃場率は20.0%（57.5%）であった。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（15筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は13.4頭（11.8頭）、発生圃場率は100%（87.5%）であった。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（15筆）の結果、1㎡当たり巻葉数は0.3枚（0.2枚）、発生圃場率は26.7%（10.6%）であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は、平年並で推移している（図）。

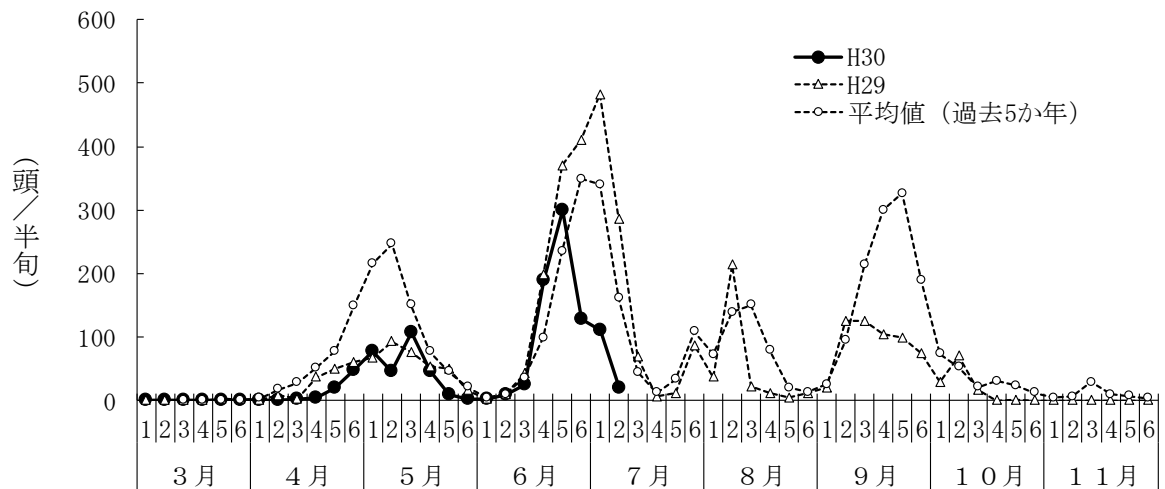


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（15筆）の結果、1㎡当たり巻葉数は0.1枚（0.1枚）、発生圃場率は6.7%（5.6%）であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は平年並で推移している（図）。

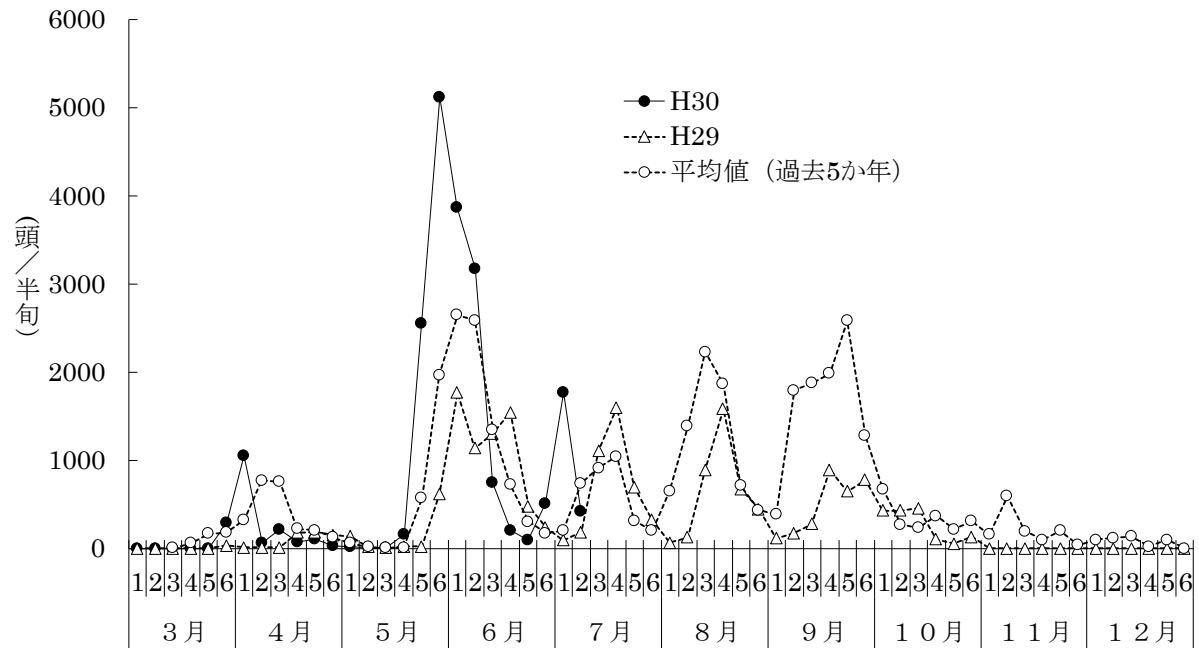


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（15筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.2%、発生圃場率7.5%）。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（15筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は2.4頭（3.0頭）、発生圃場率は73.3%（69.4%）であった。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（15筆）の結果、寄生株率は5.7%（6.9%）、発生圃場率は60.0%（37.5%）であった。

イ 向こう1か月の降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を参考にし、ふ化盛期～5日後までに防除する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日（第2世代）

地区名	標高(m)	平成30年	平成29年	平成28年	平年 (過去10ヵ年)
東彼杵町太の原	360	7/18	7/24	7/19	7/25
五島市上大津	77	7/9	7/12	7/10	7/15

注1：方法は「有効積算温度則による防除適期予測法（農林技術開発センター茶業研究室）」により、7月1日時点で予測した。

注2：使用する気温データは、農林技術開発センター茶業研究室（東彼杵町）の測定値及びアメダスデータ（五島市）を使用し、予測日以降の気温データは平年値を使用した。

なお、第1世代のふ化盛期を、東彼杵町太の原は5月14日、五島市上大津は5月4日とした。

注3：同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。